

子どもたちとの交流から学ぶ ～「親子わくわく広場」の企画・運営～

団体名●いしかわこども交流センター／芥川フィールド

代表者名●芥川元喜（人間科学部こども学科・准教授）

はじめに

いしかわこども交流センターとは、2年生のフィールドとして2018年に活動をさせて頂いたことがあった。しかし、コロナ禍以降、中断していた。昨年度、いしかわこども交流センターの小川 昇さんに再び連携した活動が出来ないか、と声を掛けて頂いたことで、今年度、久しぶりに活動をさせて頂いた。本稿では、2年生・3年生で、いしかわこども交流センターで実施した「七夕のつどい」と「クリスマスのつどい」で連携した活動を紹介する。

活動内容

いしかわこども交流センター（石川県金沢市法島町11-8）において開催された「七夕のつどい」と「クリスマスのつどい」に参画した活動である。

1. 七夕のつどい(2025年7月6日(日))

(1) 事前の活動



七夕のつどいは毎年、いしかわこども交流センターで開催されている子ども向けのイベントである。その一角(おとぎ広場)を拝借し、「みんなであそぼう！わくわくランド」の企画・運営を行った。所属する2年生を中心に企画を考え、当日、3年生も応援に参加した。2年生はポスターの制作も行った。

「みんなであそぼう！わくわくランド」には、「なんでもつりコーナー」、「ラッキーボールで遊ぼう」、「七夕飾りを折り紙で作ろう」、「おにいさん、おねえさん

といっしょに遊ぼう」のコーナーを企画し、運営を行った。学生は、来場する子どもの年齢や発達段階の幅を想定し、安全面への配慮、遊び道具の準備、声かけの方法について事前に話し合いを行った。こうした過程は、教員としての授業づくりにおける学習指導計画の立案に通じる学びでもある。

(2) 当日の活動

当日の運営においては、子どもの反応や参加状況を踏まえ、活動内容や関わり方をその場で調整する姿が多く見られた。例えば、活動に消極的な子どもに対しては無理に参加を促すのではなく、観察や対話を通して関心を把握し、個に応じた関わりを工夫するなど、授業場面等で求められる児童理解の視点が実践的に発揮されていた。また、複数のコーナーを同時に運営する中で、学生同士が役割を分担し、互いに声を掛け合いながら活動を支え合う様子が見られた。これは、学校現場における連携を想定した協働的实践であり、教員として必要な組織で働く力の育成にもつながるものである。

本活動を通して学生は、①児童の発達や興味・関心を踏まえて活動を構想する力、②状況に応じて指導や関わりを調整する実践的指導力、③他者と協働しながら活動を運営する力、を身につけたのではないかと考える。これらの学びは、教員としての基礎的力量的の形成につながると考える。以上のことから、「みんなであそぼう！わくわくランド」の企画・運営は、教員を目指す学生にとって、実践を通して児童理解や教員の連携の在り方の基礎を具体的に学ぶ貴重な機会となった。

2. クリスマスのつどい(2025年12月21日(日))

クリスマスのつどいも、毎年、いしかわこども交流センターで開催されている子ども向けのイベントである。その一角(おとぎ広場)を拝借し、「クリスマスだよ！全員集合 親子わくわく広場」の企画・運営を行った。2年生と3年生を中心に企画を考え、さらに、同じこども学科3年生の直江ゼミナールも運営に加わり、学生14名でイベントの運営を行った。「なんでもつりコーナー」、「ラッキーボール」、「わくわく



クレーンゲーム」、「ポンポンたこスナイパー」、「折り紙工作コーナー」の4つのコーナーを運営した。直江ゼミ

には折り紙工作が得意な学生がいた為、折り紙コーナーと会場のクリスマスの装飾は直江ゼミが担当した。学生は、未就学児から小学生まで幅広い年齢層の参加を想定し、活動の安全性や遊びの分かりやすさ等について事前に話し合いを行い、役割分担も決めた上で当日の運営を行った。

運営においては、学年や所属ゼミナールの異なる学生が一つの目的のもとで役割を分担し、全体の進行状況を共有しながら活動を進めた点に今回の活動の大きな特徴がある。特に、折り紙工作コーナーについては、折り紙制作を得意とする直江ゼミの学生が中心となって担当し、学生が持つ専門的な技能を生かした子どもたちへの支援を行った。

当日は、子どもや保護者の反応を受けて、声かけや活動の進め方を柔軟に調整する場面が多く見られた。学生は、子どもの様子を観察しながら関わり方を工夫し、親子が安心して楽しく参加できる雰囲気づくりを意識していた。

本活動を通して学生は、①学年や所属ゼミの異なる学生が一つの目的のもとで役割を分担し、協働す



ること、②幅広い年齢層の子どもの実態を受け入れ、理解し、運営すること、③与えられた役割と責任を果たすこと、

④参加する子どもや保護者の実態に応じて関わりを調整すること、以上の実践的な内容を学ぶことができたと考える。

成果・結果の考察

本活動の結果、学生の学びに関して、以下の点が学びとして明らかとなった。第一に、学生の子ども理解である。七夕のつどいでは、学生が子ども一人ひとりの反応や関心の違いに着目し、遊びへの参加の仕方や声かけを柔軟に調整する姿が見られた。さらに、クリスマスのつどいでは、未就学児から小学生、保護者も含めた多様な参加者への関わりが求められ、学生は子どもの様子を観察しながら活動を進めていた。第二に、協働性である。学年やゼミを越えた協働的活動を通して、将来につながる組織的な活動の在り方を学ぶ、貴重な機会になったと考える。以上の結果から、いしかわこども交流センターとの連携活動は、学生にとって、それぞれの成長につながる実践的な力を身につけることができたと考える。

最後に、この活動にはいしかわこども交流センターの方々のお力を借りた。特に、企画交流課の小川昇さんには学生の思いやねがいに寄り添って頂いた。こうした方々の温かい支えがあったことも学生たちの大きな励みとなった。感謝を申し上げる。

